

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2004年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			社会学研究科	社会学専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	社会学部 教授		宮島 喬 印		
自然・人文の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
研究課題	在日韓国・朝鮮人のエスニシティ構築——配偶者選択における歴史要因と家族				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	社会学研究科社会学専攻 博士後期課程5年		橋本 みゆき 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2004 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、社会学的なエスニシティ研究である。日本のエスニック・マイノリティである在日韓国・朝鮮人の若い世代を主たる考察対象とし、エスニシティという分析視角の再定義を試みることを課題としている。

定住国・日本によってかつて植民地支配された民族集団の経験が、民族に関する個人の社会意識（=エスニシティ）形成において重要な要因をなすのではないか。この仮説のもとで、若い世代の在日韓国・朝鮮人の配偶者選択を素材とし、エスニシティを、固定的な属性としてでなく、民族成員という各個人の立場から構築された社会的で政治的な共同意識として捉え、エスニシティの構築性を実証的に解明する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[エスニシティ] [在日韓国・朝鮮人] [配偶者選択]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

在日韓国・朝鮮人のエスニシティ構築を解明するために、①結婚の他律性(個人単位のマクロ次元)、②家族内の作用(家族という小規模集団の中間的次元)、③エスニシティの政治性(より広い民族集団や国家というマクロ次元)の3つの側面から接近を図ってきた。このうち、2004年度は特に「②家族内の作用」に焦点を当てて研究を進めた。ここでの仮説は、民族の政治的な歴史の記憶が、家族生活を通じて伝えられ、再解釈され、今日的な準拠枠を生産し、それが若い世代の配偶者選択に影響を及ぼすのではないかと、いうものであった。この仮説の検証を通して、個人と政治の結節点となる家族、あるいは、①や③と有機的に接合して考える家族という政治の場を明らかにしようとした。そのために、若い在日韓国・朝鮮人既婚者の出身家族の親世代に対する聞き取り調査を行い、多くの事例を集積することが、主たる研究方法となる予定であった。

しかし実際には、研究活動の結果、上記命題を解明することはできなかった。その理由の一つに、聞き取り調査の実質的遂行における困難がある。インタビュー協力者を探す作業がかなり難航し、ようやく聞き取りを始められたのは1月になってからである。協力者発掘方法開拓の不徹底は否めないが、日本の中での在日韓国・朝鮮人の不可視性が最大の原因だと思われる。本研究の聞き取り調査は2001年より継続して行っているが、これまでは比較的、民族名を名乗る民族学校出身者とは知り合う機会に恵まれた。今回はそれ以外の層を中心に、調査事例を増やすことを図ったものの、それゆえに対象者の協力が限られたのである。不可視化していることに加え、協力を断られることも1度や2度でなかった。逆に、このことから在日韓国・朝鮮人のエスニシティの複雑さが示唆され、興味深くもある。結局、SFR助成対象期間中に協力が得られたのは合計13件(うち、主たる対象者およびその親世代の聞き取り事例は計9件)であった。

上記命題を証明することに至らなかったもう一つの理由は、仮説自体の説明力の弱さである。いま、私が過去の歴史要因の重要性に着目しているのは、エスニシティ研究の新しい分析視角を追究するためである。歴史は常に再解釈される。したがって、過去を論じる際だけでなく、若い世代の現在進行形のエスニシティ構築を考える上でも、歴史要因は分析視角として有効だと考えたのだが、当初考えたように単純に直結させられるものではなかった。聞き取り事例において、歴史的背景への言及の仕方は決して一通りではなく、歴史問題に対する態度には複数のパターンがみられた。歴史要因とエスニシティ構築の関連という視点は基本的に誤りではないと考えるが、「歴史」概念を分析に取り込む枠組みをもう一度整理し直す必要があるだろう。事実としての歴史そのままではなく、エスニシティ構築にあたって参照される「歴史」という、「歴史」概念そのものの洗練が次の課題として浮かび上がった。

このように、調査活動の成果としては限界を免れられず、新たな課題も現れた。しかし、聞き取り調査に入る前に行った文献研究および資料分析に基づく、次の2点を研究成果として挙げるができる。これらは、本報告「研究発表」に挙げた「①雑誌論文」の2本にまとめた。

研究成果の概要 つづき

1つは、行為者の配偶者選択主体の設定という視点から、新しい家族主義的傾向を確認できたことである。これは、在日韓国・朝鮮人のマイノリティ・メディアの読者投書欄の分析から明らかになったことである。配偶者選択の個人主義化と言われる今日であるが、1970年代から90年代の期間で見て、個人が自分の意思で結婚相手を選ぶようになったとは一概に言えず、むしろ家族主義原理が新しい形で復活している。日本人と比べて在日韓国・朝鮮人の家族主義が強いということではない。これによって、家族要因が親の強制や積極的介入といった直接的な作用ばかりでなく、若い世代による上の世代の意思の参照という逆方向の作用があることが示された。データ収集には当初予想したよりもはるかに多くの時間と費用がかかったが、エスニック・メディアとしてはかなり整っていると思われる在日韓国・朝鮮人の新聞を活用し、長期的な趨勢をつかめた点で、有益だったと思う。計画とは方法こそ違ったが、2004年度の目標に応える結果となり、今後の研究に大きく資すると期待できる。

2つめは、在日韓国・朝鮮人個人という行為者を捉える分析視点が定まりつつあることである。聞き取り調査を行い、インタビュー・データに基づいて議論を展開させるに当たり、調査者・論文の書き手である私自身の認識枠組みを貫く方針を立てることは、私にとって大学院で質的調査を始めて以来の課題となっている。2004年度に試みたのは、ドイツ出身のユダヤ人政治思想家であるハンナ・アレントの政治思想をエスニシティ研究に応用する可能性を探ることである。ある人の何らかの属性と、その人が人びとの前に姿を現わして発言するという意味での「政治」的行為の間には、不可分に見えながらも恣意的側面をもつ関係がある。単に同じ属性をもつ人びとの集団という単位でなく、「民族」を、その属性をもつ固有な個人という単位で捉えることなくしては、エスニック・マイノリティの位置にいるその人を彼／彼女それ自体として見ることはできない。

これらの成果は、現在準備中の学位論文執筆に生かすことができるはずである。